

## 8 事例研究の理論と演習

藁科正弘

### 1 到達目標

- (1) 事例研究の意義と方法を理解する。
- (2) 事例研究を教育現場で適切に活用することができるようにする。

#### 【キーワード】

共通要素と個別要素，ヒストリカル・スタディ，インシデント・スタディ，インシデント・プロセス法

### 2 事例研究とは

- (1) 事例研究とは，特定の事例について，あらゆる観点から，情報や資料を収集し，あらゆる角度から集中的に分析，究明し，問題の所在，本質，原因，治療法（解決法），対策（処置）などの究明を試みることである。
- (2) 特別の問題や事例の徹底的な研究を通して，普遍的な問題，解決の方法を見出す手段でもある。
- (3) 事例研究には ①教師，カウンセラーなどが，それぞれの専門領域で，他人の力を借りないで一人で行う場合と，②数人か，またはそれ以上の人が行う事例研究会がある。

### 3 事例研究の必要性

理論や原理は，手引きとなる基本原則を示したものにすぎない。どんな現象も必ず共通する要素と個別的な要素の二つの要素で構成される。

①原理・原則は多くの現象の共通部分を取り出したものであり，②個々の現象は原理と特殊な条件や偶然の影響が複合的に影響している。従って見せかけの姿は原理とは全く異なった様相になることもある。

そのため，現実の姿を見て，元の姿を洞察するためには，①深い分析力と広い学識を必要とし，②それは，いろいろな異なった様相を呈する現象を数多く見たり経験したりすることによって初めて可能になるものである。

よって、この両方を常に平行することが必要であり、そのためには、①先ず理論をよく学び、②具体的な現象を記録し、それを分析して、原理とのつながりを検討する必要がある。現象だけをただ集めただけでは役に立たない。それを分析する方法も心得ていなくては実践の役に立たないのである。

#### 4 学校教育相談における事例研究会の意義

学校教育相談において、この方法を取り入れた「事例研究会」を随時または定期的に実施することは、児童・生徒理解、協力体制の構築、援助・指導方針の確立、資質の向上という点で効果的である。

##### (1) 児童・生徒へのかかわりのために

- i 様々な観点から児童・生徒の理解を図る。
- ii 児童・生徒への関わり方や適切な援助・指導の方法を見出す。

##### (2) 教師集団のために

- i 話し合いを通して、教師相互の理解を深める。
- ii 協力して援助・指導にあたる体制をつくる。

##### (3) 教師個人のために

- i 資質の向上を図る。
  - ii 精神衛生の向上を図る。(自分だけで悩まなくてもいい)
- 事例研究会については、複数の形式や方法があるので、学校の実情や事例の状況または目的に応じて、適したものを取り入れることが望ましい。

#### 5 事例研究の基本的態度条件

事例研究を進める場合、先ず必要なのは ①子どもに温かい関心を持っていることである。子どもに対する暖かい関心があればこそ、問題を改善する糸口に気づくのである。そして次に ②行動の背後を知ろうとする態度である。表面的な現れでなくその裏に隠されたものを理解しようとする心がけが必要である。いかなる行動も、必ずその裏には何らかの事情があるものである。そしてその心を読み間違わないためには ③それを見る目が人間尊重の心に裏付けられていることが必要である。

#### 6 事例研究の有効性と限界

事例研究は原理原則の勉強では得られない、現実の問題、個別的な現象の理

解と問題解決に役立つものであり、現場活動をする人にとってはなくてはならない方法である。しかしその事例がすべてに当てはまるとは限らない。それゆえ事例研究は、調査・統計的研究と相まって初めて有効になるものである。あらゆるケースは個別的で複雑な要因が絡み合っているため、統計的、調査的な方法が必要になるのである。

## 7 事例研究会を実施する場合の留意事項

- i 秘密を厳守する。  
実際の事例なので、当事者や関係者に十分配慮する。
- ii 事例提供者への攻撃にならないようにする。よい関わり方と思われる点についても積極的に伝える。
- iii 事例提供者を中心に据え、様々な角度から検討がされるように配慮する。
- iv 特定の参加者に偏ることなく、全員が自由に発言できるようにする。
- v 参加者は質問や意見を明確に伝え、空論にならないように心がける。
- vi 参加者は資料と補足された情報を基に客観的に判断し、推論は避ける。
- vii 全ての意見を大切にす。参加者全員で方針を創り上げていく心がけをする。
- viii 事例提供者はレポートを作成し、何に困っているか、検討して欲しいことは何かなど、問題点を焦点化しておく。
- ix 話し合われた対応策がどの事例にも効果的であるとは限らない点に留意する。

## 8 事例研究の2つのアプローチ

### (1) 臨床的なアプローチ

伝統的なやり方。問題や背後にあるものをできるだけ正確、客観的にとらえようとする。そのため必要な資料をできるだけ集めて検討し、問題行動とその原因を明らかにし、指導方針を立てていく。そしてその結果を見ながら、それをくり返し修正していく。

### (2) カウンセリング的アプローチ

目の前にいる相手の感じているもの、意識や気持ちを共感的に理解し、カウンセリングの関係を作って、その中で相手が変わって行くことに役立つとする。最初から治療を意識した進め方。

## 9 事例研究の進め方

### (1) 望ましいレポート（ケース記録）

望ましいレポートは、①問題の存在や発生を予測させる事実が含まれていること、②それに関連する事実が含まれていること、③問題解決の立場が明らかにされていることである。

### (2) レポート（事例報告書）の内容

具体的には次のような内容が含まれていることが望ましい。

#### ① 問題の概要

問題全体の流れがつかめるように、要約して書く。

#### ② 本人の状況

##### i 本人についての基本的な事柄

生年月日、年齢・学年、性別 など

##### ii 生育歴・生活歴・病歴など

周産期・乳幼児期から現在に至るまでの状況等、問題に関係すると考えられる事項について、要点を書く。

##### iii その他

性格傾向、身体状況、学業成績、友人関係、諸検査の結果等、問題への考察に参考となるものを簡潔に書く。

#### ③ 家庭環境

父母・兄弟姉妹・祖父母等家族構成やその人間関係。必要により経済状態、住居・部屋の状況等その他の家庭環境及びその変化等、参考になるものを書く。

#### ④ これまでの指導・対応の経過

ポイントを押さえ、要約して書く。治療歴、通院歴も書く。

### (3) 分析における仮説の役割

ケースの分析には、先ず仮説を立てて行くと、情報収集の助けとなる。

### (4) 結論の客観性と具体性

結論は事実に即し、客観的でかつ具体的なものが望ましい。ただし必ずしも結論に到らなくてもよい。様々な見方があることが分かることにも意味がある。

### (5) 分析記録の取り方

フィードバックの重要な資料となるので、だれが、何について、どんなことを知りたがったか。それに対してどのような内容を答えたか、できる

だけ要領よく記録する。

## (6) 研究会の運営

集団討議式に研究を進めるには10名以下（望ましいのは6～8名）、多くても20名まで。それも必要に応じて、2～3グループに分けた方がよい。

## 10 事例研究の方法

事例研究には大別して、ヒストリカル・スタディとインシデント・スタディの2つの方法がある。

### (1) ヒストリカル・スタディ

ある問題の始めから終わりまでの一連のプロセスを材料として行う方法で、一般的に行われている方法である。この方法の進め方は次のように行う。

- ① レポーターが事例の内容について、全ての情報を開示し、これまでの対応について説明をする。何に困っていて、何を検討したいのかについても説明する。
- ② その後、参加者が質問を出し、質問されたことについて、レポーターから補足説明をする。
- ③ 参加者が把握しているその他の情報があったら提供する。
- ④ 参加者から対応について、違った視点の意見や気づいたことを出し、参加者及びレポーターの全員で「どこに注目したらよいか」「何が課題か」「不足情報は何か」など、対応について協議する。

[協議するときの留意点]

#### i 見立てのプロセス

- ・ 情報の1つ1つをていねいに、情報全体を客観的に眺めていく。
- ・ 疑問に思うこと、不自然に思うことについて参加者全員に投げかける。
- ・ 家族の状況、本人と家族の関係、学校や友人関係、本人自身の発達上の課題の有無、虐待の可能性などは問題に大きく関わっていることが多いので、ていねいに検討する。
- ・ 問題の根底にある課題をイメージする。

#### ii 目標の設定と具体的手立て（プランニング）

- ・ 長期的目標と短期的目標を明確にする。
- ・ 手立てを考えると、学級担任や担当者任せにしない。
- ・ 学校が担うべきこと、関係機関に依頼すべきことを明確にする。
- ・ 具体的な動きを示していくこと。

- ⑤ 協議を通してレポーターが感じた感想を述べる。
- ⑥ 助言者から助言とまとめを述べる。

## (2) インシデント・スタディ

ある問題の断面を材料として、原因や今後の対策などを研究する方式であり、**インシデント・プロセス法**といわれる。

この方法は、マサチューセッツ工科大学のピゴース教授が、従来のヒストリカル・スタディ方式が煩雑なので、ケース研究をもっと一般化すること、現実場面で応用でき、役立つことをねらいとして開発した事例研究方法である。

その特徴は、レポートがきわめて短いインシデント（事件）で成り立っていて、メンバーはそれぞれの立場から、明らかにされていない関係事実を集め、問題点を定めるので、あらゆるレベルの人がプロセスに参加できる。また、レポーターは問題点や指導方針を提示しないで、参加者メンバーが問題に対して関係者的な心構えをもって解決に携わることになるので、かなり突っ込んだ分析もできる。この方法では田中恒男が改良した「T式インシデント法」が使いやすい。

## (3) T式インシデント法

### ① 特徴

ケースはインシデントにのっとして作成するが、場合によってはややヒストリカルなレポートも扱う。（その意味でプラグマティックな折衷法）

ごく簡単な事実だけから、一応の見当をつけさせ、その上で自由に事実を集めながら検討を進めていく方法で、情報も集めやすい。

### ② プロセス

#### i ケースの紹介（2～5分）

- ・ レポートがきわめて短いインシデント（事件）で成り立っている。
- ・ レポーターは問題点や指導方針を提示しない。

#### ii ケースにおける問題点の抽出（10～15分）

- ・ 問題点とは解決を必要とする事実のことで、「何をどう解決したいのか」を具体的に示し、「レポートのこういう事実から考えられた」と、理由も付け加えるのがよい

#### iii ケースレポートに示されている事実の確認と整理（5～10分）

- ・ これまで明らかにされている（問題の発生や経過に関係していると思われる）事実を全部拾い出し、どのような状況が明示されているかを知っておく（問題が表面化した場面、かかわりのある各人の条件など）。

#### iv 問題点に対する対策の予測（10～20分）

- ・ iiiの条件のもとで（この問題場面での）対策を予測する。

- ・思いつきでなく，理論的な裏付けがなされていること。
  - ・実際場面の利用だけでなく，メンバーが持っている経験，基礎的知識，あるいは原則，諸規定などに基づいて予測を行う。
- v 予測にもとづく事実の収集とその整理（20～40分）
- ・問題を裏付ける事実の収集。
  - ・各メンバーは，自分の立てた行動予測が可能であるかどうかを確かめる。
  - ・事実（情報）の収集の仕方や，それらの事実をつないで因果関係を見出そうとする努力は，他の方法と同じ。
- vi 事実にもとづく予測の修正（5～10分）
- ・いろいろな事実を通じて，自分のたてた予測（見当）が大幅にくずれるときは，それを確実なもの，具体的なものに変える。
- vii 対策の発表と理由の提示（10～20分）
- ・修正した仮説を対策として発表する。この対策をたてた理由も合わせて発表する。
- viii 評価（25～40分）
- ・全部の発表が終わった段階で今日何を学んだか，互いの対策についての意見の検討あるいは助言者の評価など。
  - ・解決に用いられた方法はどんな原則によっており，どんな応用がきくかとか，
  - ・どの対策が最も具体的で妥当かを，集団決定することもある。
  - ・個人名を伏せて対策を発表し，評価し合うやりかたもある。

#### （4）T式インシデント法の変形

実際の事例研究会では次のように変形して行うこともできる。

所要時間：1時間30分

- ① ケースの紹介（3分）
- ② ケースにおける問題点の抽出（2分）
  - ・何をどう解決したいのか。理由も付け加える。
- ③ ケースレポートに示されている事実の確認と整理（3分）
  - ・問題の発生や経過に関係していると思われる事実を，全部拾い出しておく。
- ④ 問題点に対する対策の予測（3分）
- ⑤ 予測に基づく事実の収集とその整理（20分）
- ⑥ 事実にもとづく予測の修正（5分）
- ⑦ 対策の発表と理由の提示（18分）
  - i 約6～8人の小グループに分かれる
    - (i) 司会者と記録者を選ぶ。
    - (ii) 各自が対策の発表と理由の提示をし，グループとして対策をまと

める。

ii 全体会

(i) 各グループの代表者（記録者）が、各グループでまとめた対策を発表する。理由もあわせて発表する。（17分）

(ii) 補足意見の発表もする。（5分）

⑧ 評価

i 全部の発表が終わった段階で、互いの対策についての意見の検討（5分）

ii レポーターが感想・意見を述べる（3分）

iii 助言者が助言する（5分）

## 1.1 T式インシデント法による事例研究会例

### (1) ケースの紹介

不登校になった中学1年生男子 A男（架空事例）

- ・ 父親の転勤に伴い、県外の大都市から地方小都市の現在校に転校した。すぐ実力テストで学年1位となった。当校の研修主任で中年女性の学級担任は成績もよくまじめで正義感の強いAを買っていた。そして後期の学級委員長に指名した。彼は拒んだが、説得されしぶしぶ委員長になった。

彼は10月の校内学級対抗合唱コンクールの指揮者に無理に選ばれた。彼が音楽が不得意なことはクラスのみんなが知っていたし、彼は固辞したが、結局受けない訳にいかなかった。彼は誰にも指導してもらえず途方にくれた。しかし、彼のクラスは特に男子がふざけていていっこうに協力してくれず、指揮が下手だと彼を非難するだけだった。

A男はとうとう発表会の1週間前から学校を休みだした。このときは担任が家庭訪問をして技術指導をして、ぶっつけ本番で発表会に臨み、何とか終わった。もちろん結果はふるわなかった。

翌日は代休で実力テストの前日だったが、翌朝靴を履こうと玄関に立ったが、足が前に出ず、とうとう学校へ行けなかった。そのときは翌日に追試を受けた。しかしA男は朝なかなか起きられなくなった。病院で診てもらっても身体的には異状はない。説得されてようやく学校へ出ても、再びこっそりと帰って来て、2階の部屋に隠れていることが多くなった。1ヶ月はこのように断続的な欠席が続いた。しかし次の日からは全く登校せず、家に籠もるようになってしまった。そして何とか登校させようとする母親に乱暴をするようになった。

### (2) 問題点の確認

M1: 彼が学校へ行けなくなったのには、学級委員や合唱コンクールの指

揮者に選ばれたことに関係があるのではないか。

M2： クラスの雰囲気や、本人に対する他の生徒の態度との関係があるのではないか。

M3： 担任は学級の生徒の連帯感を醸成するのに、どのような対応をしてきたか。

M4： 本人が母親に乱暴してまでも学校に行きたくない心情はどこからくるのか、それを十分把握しているか、など。

### (3) 事実の確認と整理

① 県外の大都市の中学から転校，成績優秀で責任感も強く，すぐ後期の学級委員長や合唱コンクールの指揮者に選ばれた。

② クラスの中は荒れていて，クラスの生徒特に男子は彼に協力的ではない。

③ 担任は校内研修委員長で，クラス運営に全力投球をする余裕がない可能性がある。

④ 両親は教育レベルも高く，本人に対する要求水準は高い。

⑤ 父親は本人とのふれ合いは少なく，母親はお嬢さんタイプで毅然とした態度は取れない。

### (4) 対策の予測

(各自でメモ)

### (5) 予測に基づく事実の収集

M1： 担任はどのようにして選挙でなく，転入生の本人を学級委員長に指名したのか。

レポーター(R)： このクラスはK男を中心とする突っ張りグループもいて，荒れ気味のクラスなので，まじめで意欲的なこの生徒に期待して委員長に選んだ。

M2： この生徒は音楽が不得意なのに合唱の指揮者に選ばれているが，どのようないきさつか。そのときの学級の雰囲気はどうか。

R： 学級内の数人の男子が，ややおもしろ半分本人を指揮者に推薦した。誰もやりたくないのだから，他の生徒もそれに同調して，本人が決まってしまった。

M3： 本人に関する何かエピソードはあるか。

R： 合唱祭後，おとなしいD男がツッパリのK男たちに殴られたと訴えて来た。そのときは両者呼んで事情を聞き和解させたが，その後加害者に何で先生に言ったのか責められ，D男はA男に言われて先生に言ったといったので，今度はA男がK男達に脅かされることがあった。

(このように様々な質疑応答があったが，それは省略して，そこで確認

されたことをまとめると次のようになる)

A男は前の学校では学習塾へ行っていたが、こちらへ転校してもこの学習塾のチェーン校が近くの市にあったので、部活の顧問の了解を得て、土曜日だけ部活を早引けさせてもらって通っていたが、本校では土曜日の午後も部活をやるので、その件については部活の先輩からよく「お前は部活をサボって勉強をしているから、いい点を取るだろうな」と嫌みを言われていた。父親はその話を聞いて、「そのような中で耐えてこそ強くなる」と取り合わなかった。

突っ張り達にも反省させ、一度A男の家に行って話をさせたが、A男は出てこず、うまくいかなかった。A男はまだ完全にはK男達と和解してはいない。

A男は肥満体でスポーツは苦手で、その代わり勉強で頑張ると言っていたと母親は話す。

家族は父親(45歳、会社出張所長)、母親(39歳、専業主婦)、妹(小学校6年生)と本人の4人家族。両親は地方の名家の出で名士の父親を持っている。

#### (6) 対策の提示

司会： 以上の結果から、問題点をどのように解決していくか、案を出してほしい。

M3： 転入したばかりに学級委員長になったことは、本人にとってかなりの負担だった上、合唱コンクールの指揮者を押しつけられ、その後あまり協力してもらえないのが、本人の孤立感を強めたと思われるので、本人を支える学級づくりをもっと強力にする必要があるのではないか。

M5： 気の弱いD男がツッパリのK男達にいじめられているのを見たとき、A男は先生に話すように助言しているが、それは学級委員長としての使命感もあったのだと思う。しかしそれが、ツッパリたちに逆にいやがらせを受ける原因になっている。本人がいじめのターゲットにならないようにするためにも、ツッパリたちの指導にもっと力を入れる必要があるのではないか。

M7： 本人がここまでに来るには、まだ表に出ていないその他のさまざまないやなことがあったと思う。もっとよく本人の心情を聴いてみる必要があるのではないか。

M9： 担任は研修主任で忙しく、十分にクラスのことを目向ける余裕がなかった面もあると思う。担任だけに任せるのではなく、十分な支援体制を作る必要があるのではないかと思う。

などが出た。

## (7) 評価

R：とても良いご指摘を受けた。どうしても後手後手に回っていたので、もっと学級作りに力を入れていきたい。

助言者：質問はできるだけ具体的に、何のために聞きたいのか、を明示すべきである。

一般に学級が荒れている時はいじめが起こりやすいと言える。したがってこのケースにおいては、学級づくりが大切な要素になると思われるのでその指摘は適切だったと思う。しかし学級づくりやツッパリたちの指導について、具体的にどのようにしたらよいか、もう一步踏み込んだ考えを示してほしかった。

なお、突っ張りたちをA男の家に謝らせに行かせたが、これはもっと慎重にした方がよかった。突っ張りたちを集団で行かせたのもA男に圧迫感を与え、かえってこじらせてしまった。最初は謝りの手紙を書かせるとかして、A男の反応を見ながら徐々に近づけるような配慮がほしかった。

担任は研修委員長で立場上弱音を吐けないという点もあったかも知れないが、誰のクラスでも問題は起こる可能性があるもので、困ったときはお互いに支え合うことが大切である。そういう校内の雰囲気を作ることも大事なので、担任は研修委員長でもあるので、他の教員の協力を求めるという姿勢をむしろ率先して出して行って欲しい。

## 12 演習

- (1) 最近関わったケースにつき、本文で事例報告書の内容として示された項目を参考にして、ヒストリカル・スタディのための事例報告書をまとめてみる。
- (2) それをもとに、数人で実際に事例検討会を行ってみる。
- (3) また別の事例について、レポーターを決めて、インシデント・プロセス法の事例研究会を行ってみる。

### 《参考引用文献》

- 田中恒男『ケース研究の理論とすすめ方（第2版）』 医学書院，1969  
小泉英二『続学校教育相談』 学事出版，1978  
山本力・鶴田和美編著『心理臨床家のための「事例研究」の進め方』 北大路書房，2001